

## 第25回小野十三郎賞受賞記念インタビュー

受賞者・江口 節  
聞き手・松本衆司

小野十三郎賞授賞理由——日常語、ふだんの言葉をゆたかな詩語として一貫して用いていること、詩集一冊のなかに長篇小説のようなたっぷりとした時間が流れていることが高く評価された。また、厳しい現実を背景としながらも、ときにユーモラスな表現が見られることも注目された。

江口節詩集『水差しの水』（編集工房ノア）より「あの街この街」を引く。

あの街を走る電車の／窓から見えるのは／あの街ではあります／手を振っているでしょ？／リュックを背負つた横縞シャツの男の子／ちらつと目が合つたのは／地下鉄の駅に向かう紺色のジャンパーの学生／古道具屋で品定めしている青年のそばへ／遅れて／少し若い私が歩いていく／街角を曲がれば／さつきそこにいた気配が確かに有つて／あの街を走る電車の／窓から見えるのは／あの日から変わらぬこの街です

詩人の精神性はどのような現実を生きようが、ぎりぎりの瀬戸際でいのちと向き合い、いのちの仕種と向き合うこと、と若い頃の読書で某詩人の言葉から学んだ。江口節の詩の世界に魅かれるのは、その精神性の見事さ故である。

●大阪文学学校へようこそ  
松本衆司 ここ、大阪文学学校なんですけれども、江口さんは初めてではないですよ。

江口節 なにかの時に何回か来たんですけど、ただ、何年かに一回だからいつも降りる駅が分からなくなるの。谷町四丁目だつたかな、いうのでね。こう右、左を見てうろうろしながら、いう感じです。

松本 でも、今日はここに着かれたの、ちょっと早かつたじゃないですか。

江口 そうですね。そういうことも含めて。

松本 ちなみにわたしが文学学校にチユーターとして関わつたのは一九九〇年からで。一言でいうと、自分の人生でここを生活の中のひとつの中所として過ごせたことは、すごく得したなという思いがあるんですよ。割り切れば、俗的なこだわりも、制約もない。ただ、自分を見つめ、社会を見つめ、生きる呼吸を確かめるように、自分の何かを吐き出して、書いていく。そしてそういう人たちが集い、作品をお互いに読み合つて評価し、いいものをいというふうに共に感動を分かち合つて、そういうような空間としてこの文学学校という場所はある。だから、組会後の自由参加の会食もたつた一二度の参加で旧知の人のように心が通うのです。ほんとに稀有な場所です、ここは。その場所に三十代から、もうずいぶん時間も経ちましたけれども、過ごしてきました。詩つて、そういう自分自身の生きることの呼吸を確かめるようななところがありますよね。

江口 ありますね。ただ、詩っていうのはやつぱり自分の心の中を書くわけですから、その書き方は人それぞれでしょうけれども、おいそれと、じやあ誰とでもってわけにはいかないと思うんですよね。だから最初からこの文学学校で、そういうふうな感覚を持てたというのは大変幸運なことではないかなと思います。私なんかは、よく分からなくって、母が俳句をしていましたことから自然発生的に気持ちを詩のかたちで書くということになつたんですけれども、それを自然に表現するということができるなくなつたのが中学の終わり、高校ぐらいいからなんですね。ちょうど高度経済成長期に商売をしている家が乗つかつたという形になつて、家の中が軋みだしたと

いうことが。

松本 確かに、あの時代、豊かになつていつたけれども、なにやら疎外感のようなものがどこかにありました。自分の中に生きるための思想や座標軸のようなものが見出せなくて、その加速度的な豊かさに馴染まないまま…。

江口 そういうものですね。ただ色々、悩みとか重さというのはあつても、いま振り返つてみると、私の生活っていうのは、たとえば食べることに困るとか、そういうどん底というものがなのに、こんな悩みを書いていいんだろうか、とかそういう思いも持つたんですね。なかなか人の事情はそれなので、そう簡単にはうまく話せないし。でも、そのところを切り込まないと自分のことは分かつてもらえないしつていうのは、誰でも詩を書く人は、それぞれの事情で同じことがあると思うんですけれども。

松本 それをどう表現するかっていうのは、そこに個性があるんでしようけども確信が持てない。

江口 それをずっと書き続けてきて、この間の『水差しの水』で、そこまでの自分を俯瞰したものがやつと書けたというところですね。

### ●「水差しの水」という詩

松本 詩集『水差しの水』にはいい詩が多くあります。「水差しの水」もとてもいいのですが、たぶん私の理解が届いていないので、まさにその作品についてお聞かせ願えますか。

### 水差しの水

展示室の  
壁の裏側に回ると そこも  
器の絵だつた

どの部屋にも 水差し 壺 花瓶 缶 ボウル  
並べ方が変わり

光と影が変わり

一日であつて一年であつて一生のようでもあつた

何も変わらないが

何かが変わるには十分な時間  
うつすら 埃が積もり

新しい器が加わり

使い慣れたものが消え

若い妻の一日は

たっぷり花を活けた花瓶に

水差しで水を足す朝から 始まつた

水差しではなく コップだつたかも知れない

随分と昔に見た映画だ

幼い一人の子を残して 妻の水死体が池に浮かんだ後  
子どもの世話をするためにやつてきた新しい妻も

一日の初め 花瓶に水差しで水を足す

死の説明はしない

日々の器があり

暮らしの振る舞いがあり

水差しの水を花瓶に注ぐ歳月を描いて

タイトルは『幸福』と付けられた

器は そこにある

テーブルの縁はすぐ向こう

壁にくつきりと水平線を引きながら

奥行きもなく 空であり地であり海であり

器のすきまに器のまぼろし

生きる抽象に時間が流れこみ

見えぬものを描きこむことに精魂をこめて

画家は 光と影の永遠を筆先に集めた

江口 詩集を編むときには「水差しの水」を最初に持つてくる  
というのは迷いがなかつたんですね。それは自分が書けなくなつた頃からずつと抱えてきた問題意識つていうものを、やつと、解答でもないけれども、自分の行き着いたところの思ひが書けたという意味で「水差しの水」というものは出てきたんです。結局一日を生きていく、というそのままの言葉では詩にはならないし、うつかりするといわゆる新聞やメディアの好きな人生論の論調に絡め取られてしまうおそれもあつたので、なかなかうまく詩の形にはできなかつたんですね。それが七、八年前だつたと思うんですけど、兵庫県の県立美術館にジョルジヨ・モランディの展覧会がありまして、最終日にやつとすべりこめたんですが、まさに詩に書いた通り、どの絵もみな器の絵なんですね。ほとんど単調に思えるぐらいい、ちょっとずつ違う、でも同じ器の絵。これつて私達の一日一日の日々のことではないかな、とそのときに自分の中にもやもやとあつたものが形をとつて見せられているという思ひが強くして、ですからモランディの絵から触発されて書いたというのではなくて、私の中にあつたものがモランディの絵によつて形になつたという思いになれたんです。これは三連からなる詩ですけれども、真ん中においた映画の連は、高校二年生のときです。五十年以上前に見たアニエス・ヴァルダの『幸福』という映画のシーンからタイトルをとつたんですね。高度経済成長期の波に乗つた我が家の中の軋みにどういうふうに思いを書いていいのか、悩んでいるとき、

新聞に「幸福とは何かということを描いた映画だ」というふうなコメントがあったので、こりや見てみたいと思つたんですね。昔は学校推薦以外の映画は親同伴でないといけない、というような時代でしたので、母親に頼んでいつしょに見たんです。昨日もちよつとお話ししましたけれども、私が母に敵わないな、と思うのは、商売とか事業とかいうものを男に伍してというか、むしろ抜きん出で一人でやつていく、そのことに女同志としても誇りはあつたんだけど、一方で中学高校になつていろいろ家庭科の宿題とか出てきて、たとえば編み物とか、なかなか難しくてもたもたしていると、「ふん、ちよつと貸し」と言つて、ぱつぱつと鉤針なんかを教えてくれるんです。台所も普段は通いの人がいて、母が台所に立つことないんですけども、夜や土日に娘たちがもたもたしているとバツとやつてくれて、敵わないな、という気がするわけですよ。で、人一倍忙しいのに娘が「見たい」というと映画にもついてきてくれる。世の中、色々な人がいて、色々あるけれども、あの職業はこういう狭さがある、この職業はこういう狭さがある、社会の裏表も教えてくれるというか、何を言つても敵わないな、と思つてしまふ。だけど、この家の幸運な家庭が、夫のほうがちよつと浮気をすることによつて、それが妻にバレて、——妻は幸せな家庭に満足してて、いつもいつも愛を確かめあつてゐるような日々でしたから、まさか

と思って絶望のあまり自殺するんですね。そういう説明とかいきさつはなくて、本当にセリフも少なくて、突然場面が変わつて、水死体があがつてきてる場面があつて、その後は夫の浮気した相手が新しい妻となつて入つてきて、やつぱり小さな子供を挟んだ家庭は続いていくつていうだけなんですね。そしたら、新しい妻も元の妻も、日々が続いていく場面では、朝起きたら大きな花入れに水を足していく、それが私には印象的だつたんですね。昨日、文学学校の方が私の詩集を持つてきて、お話ししたときに、同じ映画を見たのにその場面は覚えてないとおつしやつてました。私は高校生でしたけれども、そういう問題意識があつて見たから、何かなどいうふうにずっと気になつてたのだろうと思ひます。このシーンのことは今まで書かず、詩の形にもしていません。でもずつと気になつてたのが、モランディのいくつもいくつも器の絵のバリエーションがある絵を見ていくうちに、ああこれが一日を生きしていくつていうことのつながりなんだというふうに、あの映画も夫の浮気で妻が自殺するなんでものすごい残酷なんですけれども、それでも一日が続いていくつていう。あれがシンボル的に書かれていた「水差しの水」のことなんだな、と気づいて、ためらいなく詩の構成はすぐ出来ました。むしろひとつひとつの一 日を生きることが、生きていくことの繰り返しの、普遍的なものだという三連目をどう書くかはかなり考えました。一連、二連は自分の中にあることなので、ためらいなくぱつと出てきましたね。プライベートなことでいえば、この詩集の後半で出てくる妹の精神的な病、結

局妹は跡取りとしてそういう中で潰されていったという形に私はとっているんです。だから、神戸に家庭があつて、夫も一時単身赴任で忙しいときが重なつたんですが、故郷の家業の方をなんとかテコ入れしないと：みなそれぞれ生活もかかっているし、という思いで行くようになったんです。でも、そんなに長くかかるとは思いませんでした。ちょうど平成になつた直後ぐらいだつたかな、ということは、ちょうどバブルが崩壊した直後ぐらいですね。

松本 九一年ごろかな。

江口 そのバブルのときの勢いだと、いろいろ借金もあるけど元の土台が大きいから整理したら五、六年で片付くだろうと思ったんです。同族会社のごたごたを他人にお願いできなかつて、と行きがかり上なつたんですけど、ところがバブルが崩壊した後で、物が処分できない。そのうち阪神淡路大震災があつて…。神戸だけではなくつて、新幹線が止まつたといふことで、新幹線沿いの広島の方の商売にもかなり影響があつて、どーと下がつていくんですね。なんとか維持するのが精一杯という状態になつて…。そんな時に息子の病気が重なりました。結局、息子の病気も夫の予防注射によるB型肝炎が原因だというのも、だいぶ後になつてわかりました。最初は母子感染ではないかと疑つて、でも、お姑さんには聞けない、という思いをずっと抱えてきた年月が、長かつたですね。そういうことで、やっぱり時代に動かされて人のいろんな山やら谷やらがあるというのも今振り返ると実感できると思うんですけど、渦中にあるときは、やっぱり個人的な力と

か性格とか、いろんな要素も考えますから分からぬんです。そのときに考えうる限りのことで整理しようとしたり、また向かっていくという形をとるんですけれども…。

### ● 同人誌のこと、そして詩の教室のこと

松本 いつしょに「多島海」させていただいていて、作品やあとがきの「入り江で」などを読んで、思うことでもありますけど、江口さんはほんとにひとつひとつのことに一生懸命に取り組んでこられた、と。そういう印象はすごくありますね。

江口 ありがとうございます。松本さんと出会つたのは、私の第三詩集『木精の街で』の縁ですね。神戸の地震の起きる一週間前に、印刷所のほうに原稿を送つた詩集が四月にできてきました。阪神淡路大震災が一月で。その四月にできた詩集を松本さんが「樹林」で批評してくださつた。それからこのあいだ松本さんが「多島海」で書いてらつしやつたけど、神戸で安水さんをゲストに朗読会をなさつたのです。その時に初めてご挨拶をさせていただいた。だから「多島海」を立ち上げるまで一回しかお会いしていなゐのね。詩集評は書いてもらいましたけど…。「多島海」のメンバーはどの方も、みな一回ぐらいしか会つてないですね。彼末れい子さんも、彼末さんが出した詩集の朗読を兵庫県現代詩協会の総会でするときに初めて会つて、詩集をもらつたという関係だけでした。森原直子さんは、私の第二詩集がきっかけで詩人クラブの会員になつたとき、ちょうど森原さんも同じように会員になつ

たところで、直後の詩人クラブの関西大会でお会いして、秋と春の生まれの同じ歳、年長の詩人が多いなかで、二人で意氣投合したのです。

松本 会うと、三人がとても楽し気で、仲がいい。森原さんとどつちが秋なんですか？

江口 森原さん。森原さんが乙女座で、私が牡牛座、そういう関係。だから森原さんとはもつと会つたかな。関西大会に彼女が来てくれたときにも。

松本 彼末さんは年上？……

江口 彼末さんは三月生まれだから、歳は二つ上だけど、学年は三つ上なんですね。そうやって挨拶ぐらいか、もうちょっと話したといつてもせいぜい一、二回の人たちばかりだつたんです。さつき言つたように神戸の地震のあとも、故郷のほうのごたごたがだんだんとシビアになつてきて、予定ではこの時点で終わつて手を離れてははずだつたのが、ますます引つ張られるという感じになつたところに、就職した次男に病気の症状が出たんです。ひとりではちょっと無理だろう、これは一生涯つきあう病気だから、といつて帰つてきて闘病に専念することになつたんですね。そうすると家の中に病人がいるのと、実家の仕事も人間関係と大きな借金との交通整理みたいなもんですから、それも重たいですから、外と中とで気持ちを持つしていくのがいっぱいなんですね。詩人会議が持たないから、とても他のことを、いわゆる

世間話的なことでお茶を濁すということもできない。時間的にも、出ていくのもしんどくなるし。世間話をするというのもできなくなるし、出ていけないという気持ちが強まつて。ただ、神戸の地震という、目の前でがらがらと崩れているビルとか、人々の様子を見るというのも大きな衝撃でして、詩は書いてしまうんですね。そういう状況の延長にありましたから、詩は。

松本 そうですか。どんどん思いが溢れてきて、やむにやまれず……ですかね。

江口 そう、書いてしまうんですね。だから、その状態を見てお声もかかって、結局、当時は四つの同人誌に入つていたんです。「叢生」、「現代詩神戸研究会」、「輪」と、それから東京の「地球」。「地球」は合評会に行くことなんかはないんですけれどね、締切がそれそれあって、それに向かつて書いていくというのがしんどくなつてきました。地元の同人誌でも合評会にもなかなか行けないとなると、気詰まりな部分も出てくるし、神戸は細長いけれどもわりと狭いですからね。でも書きたい思いはあるんですよ。こんなふうに人の締切に合わせて書くよりも、もうちょっと自分の内で熟成したものを整理して書いていきたい、という思いもあつたので、やっぱりこれは自分のペースで書けるように持つていくしかないだらうと思いました。「叢生」は最初から辞めることは考えてなかつた。これが自分の活動のベースですから。それで、それ以外の三つには申し訳ないけれども辞めて、でも書くべースとして、今までは「叢生」も他の同人誌もみな私よりも

十歳から二十歳くらい上、親の世代の方が中心の同人誌でしたので、同じ世代の人とのふれあいというものが私にはほとんどなかつたんですね。親の世代の人たちについていくのは、わりと自由な気分でできるんです。若いから何やつてもいいだろうぐらいの気持ちになれるんですけど、やっぱり同世代の人とのふれあいや切磋琢磨も欲しいという気持ちと相俟つて、結局は「叢生」以外は全部辞めまして、四、五人の方に声をかけてみたんです。まったく申し訳ないけど、同人誌の合評会はしません、と言つて（笑）。必ず詩と散文を書く。あとがきもみな同じように書く。私はただ事務作業のキーテナントというだけのことで、という。まったく自分の都合ばかりを言つて、声をかけたんですが、それがやつぱり五十歳前後の皆さんもちょうど現実の世俗のほうの仕事に忙しいときでもあるし、会わなくても書けるだけ、年に二回だけ、というのに、お返事いただけました。まあ一人は「もう詩はやめてる！」と返つてきました（笑）。もう一人は梨の礫だなと思つたら、森原さんが「あの方は、締切というのが苦手な人なのよ」「ああ、じゃあ仕方ないね」というので、返事をくれた三人で。私の勝手なベースでお願いしたんですけども、キチツキチツと締切には原稿が届いて、びっくりしました。「多島海」、ここまで続くとは私も思わなかつたんですが、ここまできたら、事務作業も目がしょぼしょぼで大変ですか、う、それができるうちぐらいまで、五十号まではいきたいなと思つてますけれど。

松本 「多島海」、私もなんとか五十号を目指してもう少し頑

張ろうと思います。「鶴鴨」という詩誌は何年前からですか。

江口 二〇一二年の六月からですね。その前、二〇一一年に教室の方から「講師に来てくれないか」とお電話をいたいたんです。教室というのは、島田陽子さんが二〇一一年四月に亡くなられて、島田さんが教室を四つぐらい持つてらしたのかな。朝日カルチャーや豊中のほうとか、寝屋川のほうにも持つてらした。朝日カルチャーやの生徒さんから「お願ひできないか」ということがあって。私は詩というのは教室でやつてきたんではなくて、手当たり次第に読む、若いころは「詩学」「現代詩手帖」「ユリイカ」だとか、本屋にあるようなのを読んだりしながら、あるいは図書館で読んだりしながら、自分の書きたいものはどういうふうなものだろうと、自分で自分を探すという形をとりながら書いてきたので、そんなお話を電話でうかがつたときに、「教室つて何するんですか」ってむしろ聞いたんですね。朝日カルチャーやの島田さんの教室つていうのは、歌う詩を書くというので、メロディーに合わせて字数を揃えるとかね、繰り返しがあるとか、ひとつの方々がつたらいいんですけど、もちろんそういうことは私はできませんし、「それでもいいんですか」と尋ねたら、「それでもいいんです」と。そしたら一つがオッケーになつたということで、豊中の教室の方がやっぱり「お願いします」と来たんですね。そういう形で、カルチャーやは月二回、豊中のほうが教室は二つ、月に計四回、六甲山の裏側から大阪に通うことになりますと、さすがにちょっと（笑）。

余裕をみると二時間前には出ないといけないというのが、現役の時と違いまして、だんだん負担になつてきました。「鶴鶴」は二〇一二年に朝日カルチャーの作品集として始まつたんです。それも「島田先生はこういうのを作つてらつしやいました」「あ、そうですか。じゃあ作りましょうか」という笑。まあ本当に生徒さんに教えてもらひながらです。島田さんのような詩の形を教えるとかそういうことはできません。自分が勉強したのは、いろんな詩を読みながら考えて、自分の中の詩の気持ちを溜めていくという方法だったので、私は詩を紹介するという形で、集中的に。もちろん一般的な茨木のり子さん、石垣りんさんから入つたりしてね。もう大抵の方は読んでらつしやるんですけど、でも一応私なりのコメントを出すという形で入つていつて、次にたぶん鈴木漠さんのこういう定型詩なんかご存知ないだろうな、というふうに広げていつたんです。その形が六年ぐらい続いて、また私のほうが体力的にも精神的にもちょっとしんどいし、申し訳ないけど皆さん、一緒になつてくれる? と言つて頼んだんですよ。

松本 なるほど、なかなか大変なことですね。以前、江口さんが島田陽子さんのあとを引き継いで詩の教室をすることを私に相談されていたのを思い出します。豊中の教室では詩誌は出してなかつたのですね。

江口 出してなかつたんですよ。自分たちで出すというのもなかなか大変で、ただ一度だけ「土曜会」というのは出したんですよ。島田さんがいらしたときは豊中は「ゆりのき」と

いう詩誌を、それは「叢生」とおんなんじ印刷会社、奈良の鳥語社さんがするという形でやつてたんですけれども、奈良の鳥語社さんも高齢で無理。新たに印刷会社を探すということでも、私は、大阪には全然伝手がなかつたので、「申し訳ないけど自分たちで探してやつてみてごらん」と、「土曜会」はとりあえず一冊は作つたんですね。「木」つていいます。だけどその次は続かなかつた、という状態。火曜日的人はそれもできずだつたので、それならもう「鶴鶴」はパソコンでデータをもらえば全部雑形ありますから、多いも少ないも一緒にだから、みなできるだけ添付ファイルでくれる? という形で「鶴鶴」の六号から、二〇一四、五年ぐらいから三つの教室合同の作品集というか同人誌という形にしたんです。最初はカルチャーの作品集から始まつて、ここまで一緒になつたから、次は教室も一つにしてもらえないかと頼んだんですね。そしたら、やつぱり教室を維持するには場所とりが大事ですからね、一時は神戸の三宮の駅前のほうをとろうかという案もあつたんですけども、豊中の生徒さんが一番多かつたので、豊中の今までやつてたところが登録すれば部屋が優先的にとれるから、というので豊中に一本にしてもらつたんですね。まだ学校の先生とか、現役の人もいたから土曜日にしましようとなると、カルチャーは火曜日とか木曜日とか、もうひとつのはうも火曜日とか、平日の人気が多かつたので、やっぱり土曜は他の予定と重なつて来られないという人も出てきました。実質二〇一七年にそういうことで統合して、今は八年目です。教室に来られる人が十人ぐらい。教室には来られ

ないけど年に二回の「鶴鶴」には作品を出す、これはカルチャードラマだった人が多いんですけどね、その人が五、六人。

松本 送つて頂いた「鶴鶴」を気楽に読ませていただいていましたが、いろいろ大変なんですね。教室は月に?

江口 一回。時々、いい詩があれば紹介するという形で、やつぱり合評というのが大切です。読んで思うだけなら誰でもできるけれども、それを言葉にするというのがなかなか難しいんですね。「ああよかつたです」とか「すてきです」とか、ただそれだけでもいいけど、そこからもう一步踏み越えて人の作品に感想を言うということが自分の作品を見直すときの推敲の力になるんですよ、と。

松本 たしかにそうですね。

江口 それもあつて、統合する前は紹介する詩の分量が多くつたんですけども、統合してからは合評のほうに力を入れていて、紹介は一、二篇をたまに、という形でしますね。皆さん、お上手になられて（笑）、私も歳が歳ですから、どこかで引くこともそろそろ考えないといけないかな、ということも念頭にあります。

松本 でも、その教室の方たちもかなりの年齢でしょう。

江口 そうなんですね。六十代前半の人もいますが。

松本 文学学校でもそうですね。四十代の方が若い人で、それもぼつぼつですよ。圧倒的に六十代、七十代ですよね。なかなか若い人がね、なんでしょうね……。

江口 （笑）。でもね、この四月に若い人、五十代になつたばかりの人が入つてきたんですけどね、でも彼は四年前から突

然詩を書き出して、わーっと書いてまとめた冊子がもう七冊あるつていつたかな。すごい勢いなんですね。彼がnoteに書いてると、見つけた人がいて、開くと、確かにしつかり書いてる。そのnoteのページは、けつこう詩のページがあつて若い人がたくさんいるんですね。

松本 知らないなあ、そのnoteというの?

江口 インターネットのページで、小文字でnoteっていうのがあるんです。検索したら出てきます。ブログみたいな、さらに詩とか、現代詩、とか打つたらまた何人か出てきて。けつこう若い人たちがお互いに感想を寄せ合つたりして。私も見始めて日が浅いので知らないけれど、noteの中でもそれぞれ評価するような部分があるらしい。もちろん、個人でブログを持つて、個人でネットワークを広げてやつてるっていう人もいるけれども、パソコン上、ネット上にnoteっていう大きなネットワークの箇所があつて、それぞれ一つずつの部屋をもつて詩を書いてるっていう人が多いんだつていうのを初めて知りました。

松本 なるほど。そういうところにいるのか。

江口 また、インターネットの詩投稿ページがあつて、大阪の島秀生さんっていう方がネット詩誌で、やつぱり添削やらもらってらつしやるみたいで、私はそういう部屋があるということは聞いたことはあつたけれども、そこでどういう人がどういうものを書いてる、というのは見たことがなかつた。でも、今年の四月に入つてきた若い人が、その島秀生さんのところにも書いていろいろ評価してもらつたり添削してもらつ

たりして、というのは聞いたので、けつこうリアルの場には出てこないけれども、若い人はやっぱり書きたい人は一定数いるんではないか、というのが私の感触なんですね。ちょうど

どこの一年、去年の秋からこの秋まで、「詩と思想」の詩集評というのを三段組四ページで毎月五四〇〇字でできるだけたくさんの人を紹介したい、と十五、六冊から多いときに二十冊ぐらい紹介しました。だから一冊の紹介文ができるだけ、中にはやっぱり「病気がちで入退院を繰り返してのけれども、noteに書いてます」という北海道の若い

女の人がいてね。そういう人もいるというので開いてみると、

ほんとにそういう状況だから更新は少ないけど、ぱつ、ぱつと書いてらっしゃるんですね。それを見ると、短歌や俳句は

今は若い人にもわーっと広がってる機運があるんですけども、それはやっぱり字数の短さで、SNSなんかで感想を言い合つたり評価しあつたりネットワークを作りやすいといいうのもあるんだろうと思うんです。でも詩はそこに收まりきらないものと感じる人がどうしてもある。私も母の俳句から入ったので俳句に馴染みはありますけれどもやっぱり詩を書いてしまう。それは收まりきらないものがあるんだと思うんですね。だから詩を書く人はやっぱり、メディアが取り上げてくれるかどうかは別として、一定数は常にあります。それはAIができるようなことではないんじゃないかな。まだAIの書いた詩というのを直接読んだのはないんですけどね。

江口 どんな感じですかね。俵万智さんがAIの書いた短

歌というのを評価している新聞記事は読んだことがありますて。

松本 兎に角、生成AIは過剰です。脅威を感じますね。

江口 そんなことを考えながら、私自身がそういう、時代の個人に対する影響というものを抜きにしては考えられないことを悩みながら書いてきたという思いがありますので、社会を描くというのではなくて、時代の流れというのは無視できないなという実感は今あります。

### ●大切なのはやはり「触れあう」ということ

松本 確かにこれからどうなるのか。

江口 分からないですね。

松本 この文学学校だって、一九五四年にスタートして、だから今（二〇二三年十一月現在）は六十九年ですよ。私は五四年の一月生まれだから。

江口 同じなんですね。

松本 今後若い人がどんなふうにこういう場所を、つまり、触れあって生の言葉でやりとりして、そういうような心の通う場所を……もちろんコロナもあって、オンラインでかなりのことができるようになつてしまつたけども、でも本当に触れあってという、そこが人として、それこそ江口さんも書いてらっしゃるけれども、魂の底から湧き上ががつてくるものとの出会いというんだつたら、そういうような触れあいがないとねえ。

江口 そうなんですよね。今年の春に入ってきた五十歳過ぎ

の彼がですね、四年間ものすごく大量に書いて冊子も何冊も作って、インターネット上で詩の添削も受けたりしてるので、noteというコーナーで自分の部屋を持つて、書いたり発信したり、そこにちゃんと下の方に「いいね」とかありますからね、ある程度の反応を受け取ってるんですけども、やっぱりリアルの触れ合い、それを求めて来る。そういう場っていうのは必ず要ると思うんです。というのは、十一月のはじめに兵庫県現代詩協会で一般に向けた詩の講座をひらくことになって、私の担当する講座で話したんですけど、いわゆるテキストからくる情報量っていうのは、七%です。これは人が対談するときを分析したアメリカの心理学者の説です。情報の七割は目から来る、あとは様々な感覚。そういう総合のものだといいます。今は、テキストだけの情報量が膨大な時代ですけど。

たとえばこうやって直接松本さんとお話しする機会って二三十年の付き合いがありながら意外とないんですね。「多島海」も二、三年に一回文学散歩みたいなことをやりますけれど、四人でばらけてばーっと話を立てて、食事して、はいさようならで、そんなに突っ込んだ話はしたことない。

松本 たしかに、ないです。

江口 今回、昨日、今日ぐらいが初めてだといつたらほんとにびっくりするような形ですけれども。

松本 ないけども……ですね。

江口 ね。そうなんですね。ないけれども、触れてることでお互いの人間同士の信頼感というのは、言葉で言うのと

は違うものを、二、三年に一回会いながら感じて、ますます結束が強くなつたという経過があると思うんですよ。それはその人の話し方かもしれないし、文字で出てくるものではないんです。それ以外のものなんですよ。そういうリアルなふれあいっていうものがやっぱり最終的な実りになると思うんですよ。自分の中のね。

松本 そうですね。それがひとの人生っていうか、その豊かさだとか、生きている実感とか、そういうものに…。

江口 そういうものになつていくかと思うんですね。でも体験すればいいだけもいえなくて、なんでも見てやろうみたいに世界あちこち行ってというのもいいけれども、たまに外に出ていくだけでも、ただひとりのときに一生懸命読んだり書いてワンステップ上にあがれるつていうことだつてあるわけで、体験の多少ではないけれども、体験はないと困るなつていうところなんですね。

松本 それがなんか、体験も乏しいし、SNS的な、デジタルやヴァーチャルなその部分で生きていけるんだ、みたいな錯覚？ そこから抜けられない若い人たちがいる。ますます世の中も生成AIでエスカレートしていくし、どういうふうに触れていいのか、それがわからない。

江口 そういうことですね。逆にそういうふうにインターネットやテキストだけでやってると、そこで隠せている部分というものをどう出していいのかというのがあると思うんですね。

松本 本当に奥まつたところにある自分自身の悩みとか、思いとか、それが表現できないし、ふれあいの中で語れないし、やっぱり自分がいて他者があつて、そして自分の内奥のものがあつて、そういうものとそれぞれ往還しながら自分自身の生きる豊かさとか、生き方を確認していくんだけれども、他者との関係が弱い。自分自身の内側の魂との触れあいみたいなものもデジタル的なバイアスがかかってできない。そんな状況にこれからますます人々が追いやられてしまう。

江口 そういうものはやっぱり身体のある人間の感覚とはかけ離れていくんじゃないかな、という気がしますね。文章を読んで、いろいろな本を読んで、自分の疑問を考えていく、あるいはそれを解いていくとか、その中で構築していく人もいるんです。もちろん。これだけ膨大な情報がいつぶんに入つてきますからね、それを理解するためにもそうせざるを得ない。だけどそれだけではやっぱり身体の熱さ的なものは伝わつてこない。最終的には人間の頭だけブールの上で浮かんでてね、人間の頭だけでなんでもできるわけじゃないんですよ。首から下の体がついて、首から上が動いていくわけですから、反応を確かめながらね。

松本 そういう皮膚感覚から滲み出てくるものがある。江口さんの詩集でもそうだけども、日常にある言葉を何気なく使つて書かれていて、だけれども、どきつとさせられる。ああそうか、というふうに思う。それってやっぱり日々の暮らしの中で、さつき言つたような自分自身と魂との往還、他者との関わりのなかで積み上げてきた自分自身の内的な経験、そ

ういう「自分」というものがこれを読ませる。それがまた新たな自分自身の発見にもなるし、新たな一步を踏み出す勇気にもなる。そういうような奥行きのある経験をこれからの人たちにもしてほしいし、それが生きるということの大きな支えになるのかな、と。だから、江口さんが二十歳前後の頃、七八年書けなかつたという時期があるじゃないですか。そういうふうに迷つて悩んで、どう自分自身を活かしていくべきなのか、それを自分で手探りでさがす。そういう経験を、今の人たちなりにはもちろんするんだろうけれども、どこかで世の中の流行みたいなものを受け入れてそれ以上のものへ、パラダイムを超えたものへのアプローチをしない、そんなことを感じます。詩集だつてもつと読まれていい。我々の若かつた時代一九七〇年代に、西武デパートにポエムパロールだつたか、ポルトパロールだつたか、詩集専門店があつたし、古本屋での本探しが生活の一部だつたし、マイナープレスがあつたし、いろいろあつたじゃないですか。それくらい読まれましたし、自分の表現なり、あるいは自分自身を探すだとか、魂とのふれあいを求めるとかいうふうなものだつたと思う。

江口 今もう新聞なんかではほとんど詩を読むことはありませんでしよう。神戸新聞には投稿欄があつて時里二郎さんが選者になつていて、毎週何篇か紹介されてるんですね。ずっと書かれていて、だけれども、どきつとさせられる。ああとそこだけで書いてるつて人もどうやら多くて、けつこう皆さんお上手なんですよ。でも年齢的には私らぐらいの方が中心かな。ところどころ若い人が入つてるようなときもありますけれども、昔はもつとそういう欄が各地にあつたんじや

ないかな、と思いますね。

松本 だいたい、文学という言葉が今はもう半分消えかかってるような状況がありますから。

江口 でも、文学ってなんなんでしょうね。

松本 この文校で、大阪文学学校はそう呼ばれているんですけど、私もクラスの人たちといつしょに長年、詩の勉強をしていますけれども、一人ひとりその人の人生を背負つっていて、書かれるものがまったく個性的で違う作品なんです。出来不出来はあっても作品なんです。それを生で読ませてもらつて、それぞれの世界がみんなおもしろい。共感できる。

江口 一律に均すことができないんです。それをもつと自覚したら、もつと自信を持つて自分の詩が書けるんじゃないかと思うんですけどね。言葉の多少は経験数の年数の違いというだけのことかもしれないし。

松本 それの方が経験から自身の言葉を出してこられるけれども、詩の場合だつたら「それはほんとにあるの言葉なんですか?」みたいな、「借り物じゃないですか?」みたいな、そんなふうなやりとりをしながら、「借り物だつたから」とかね、そんなことに気づいていつて、自分の書きたいものに辿り着く。詩つていろんな世界があつていいし、いろんな書き方があつていいし、わずかな言葉で見えないものが形になるような面白さがあつて。そういう意味でいうと詩が文学の中心であり続けてほしいし、そこからいろんな真実や豊かさが出てくるんじゃないのかな。

江口 そうですね。

松本 とてもおもしろい世界だと思う。江口さんがこれだけ書かれて、世間にもつと評価されていいし、たくさんの優れた詩人たちが書かれたものがもつと世の中に出でいいし、それがなかなか、日本社会の体質かもわからないけれども、俳句だと短歌だと向こう側にある変な、難解な世界という拭い去れない印象を持たれていて、結果的には詩のところまで人々が辿り着けない。

江口 短歌や俳句は知つてます、ということは言えるけど、「詩を書いてます」とはちょっと言いにくい感じはあります。

松本 文庫本になつてあるような詩集つてあるじゃないですか。でも、そういうようなきらびやかな気の利いた言葉、それこそ生成AIが作れそうな詩だと思つてゐる人もたくさんいるわけで。それをやみくもに否定しないけれども、それだけじやないんだよ、というね。

江口 きらびやかな言葉というの、日常の言葉とはちょっと違う、「あ、こんなのがあるのか」という驚きを一般の人々が持つてくれるきっかけにはなると思うんだけれど、詩は基本的に自分の内面を見つめるところから、どうしても出したい、出さざるをえないものが言葉になつて出てくるわけなんです。ただその言葉つていうのは基本的に、松本さんが持つてる言葉も私が持つてる言葉も、例えば赤という言葉でイメージする色はいつしょじやないと思うんですね。同じ言葉でもひとりひとりが違うイメージを持つてるはずだ、ということを話して、すり合わせて、あるいは読んだりして、

逆にそれで、この言葉でこういうふうな内容があつたのかと知ることでむしろそれを自分の中にファイードバックして自分を見つめ直すきっかけにもなつたりする。詩は言葉ではあるんだけど、その言葉の幅広さというか、複雑さに気づいてほしいというか、そのためにも書いて読み合つたり、たくさん詩を読んだりしてほしいなとは思うんですね。

松本 いずれにしても、江口さんの詩集はもっと多くの人に読んでほしいと思います。

江口 松本さんの詩集もよかつたですよ。やっぱり全然いまの現代詩の主流の人とは違う世界を皆さんに提示しましたからね。そのことは逆に救いだつたと思うんですね。

### ●マリー・ノエル「内面の手記」の翻訳と田辺保との出会い

松本 ありがとうございます。江口さんのマリー・ノエル「内面の手記」の翻訳についてお聞かせいただければ。これも面白い経験というか、田辺保さんとの出会いも含めて。

江口 私はどういう方向に行くかと悩んだときに、自分の好みは文学系だけれども、これでは食べていけないだろうと。でも経済系でもない。これらの時代は外国语だらうけども私はしゃべるのは苦手。でも無理矢理やつとけばなんかなるだろうと外国語学部のフランス語をやつたんですけど、結局沈潜するばかりでそれを扱う仕事には就かなかつたんですね。だけど勉強したつていうことでそちらのほうの関心はずっと持つてたんです。でも、フランス語の一般的なイメージとはちょっと違うなという思いもあつて、例えば私はパスカ

ルとか、特に学生時代はシモーヌ・ヴェイユなんかを読んでたりして、同級生に「お前、そんなものの読むから難しくなつちやうんだよ」なんて言われたりもしたんですけど、それは一般的な華やかなフランスのイメージとはちよつと違う。でも自分が読みたいのはこんなものだ、というのがずっとありました。そしたら一九八六年か、八七年か、神戸新聞に田辺保さんの小さなコラムがあつて、いろんな冊子からの言葉を引用してそれに解説をつけていらした。田辺保さんはそのときは大阪市立大のフランス文学の先生だつたかな、それでフランス語のものが多かつたんですけど、そのときにマリー・ノエルの非常に内面を深く書く二、三行を引用してその説明がちよつとあつたんです。五センチ四方くらいの本当に小さなコラムだつた。「あ、私が読みたかつたのはこんなのだわ」と。自分の内側を見て、もう一度自分を見つめ直さないとだめだ、というような。マリー・ノエルはそのとき初めて知つたんです。読みたいな、と思つてたんですけど、ちょうど三人目が産まれたのと、実家のほうで病人が続きまして、子育てと行つたり来たりのバタバタの時期で、思うだけでものまま七年ぐらいいたら、神戸の地震があつた。で、うかうかしてたら人生何があるか分からぬ、という気になつて、地震で半分閉めたような元町の丸善に行つて、一生懸命探して、マリー・ノエルの本を全部注文したんですね。全部来たわけじやないんです。この人の中心的な全詩集みたいなのは手に入らなかつたんですけど、後期の一、二冊と、それから内面の手記という、日記でもない詩作の書みたいなものの。彼

女としては自分の心をさらけだしてゐるから人には読ませられない、とはいながら途中でそれが本になつて向こうでも出版されたりしてゐるんですね。それを手に入れて、それまで仕事にも何も使ってなかつたフランス語をサビ落としながら、少しづつ読み始めた。それが最初なんです。でも読むだけだったらもうひとつちゃんと理解してない。それを翻訳して書きだしていくと「あつ、ここちよつと間違えて訳していた」とか気が付きますからね。それで「多島海」のみんなには「ちゃんと詩とエッセイと両方書くのよ」と言いながら、私はエッセイの部分をその翻訳を発表する場にした。実は、普段何を考えているか、自分の状況がごちやごちやな時だから、エッセイを書くことができなかつたんですよ。逆に自分を見つめ直す場としてノエルを訳してた。やっぱり翻訳つていうのはそこに没頭しますから、日常のごちやごちやしたところから離れができるんですね。その時間がすごく大切で、そんな時間があるからこそ締切までにひとつの詩も書けるし。

江口 ふうな状況で、とりあえずやつてきただんですね。田辺先生とはそのとき、会つたことはなかつたんですけども、何か読みたい本がないかな、とジユンク堂の棚を探してたときに、文庫の棚でシモーヌ・ヴエイユを見たんですね。ああ、久々だな、と思って見たらそれが田辺保さんの訳だつたんです。『重力と恩寵』という。やっぱり自分の目が行くところ、行くところにフランス語の田辺保さんの名前がある、というので、ちょうどその頃朝日カルチャーニー中之島の講座を持つてらつしやるということも何かで読ん

でいたので、それまでは「こんな忙しいときにとても行けないわ」と、神戸の裏から、故郷のことと自分の家のこととで必死で忙しいのに無理だわ、と思つたけれども、そんなことが重なると、やっぱり今でないといけないという感じで、二〇〇〇年に中之島朝日カルチャーに申し込みました。忙しくてもやっぱりそれだけの思いが昂じて決断することはできるんですよ。時間作れるんですね、必死で走りながらでもね。終わつた後の「お茶飲みましょうか」という時間には付き合えなかつたけれども、必死で走つて帰つて、ご飯作つてという状況でしたね。できるものですね。

松本 すごいなあ。

江口 そういうことで、そのうち田辺先生に「多島海」を「私、こんなふうに訳してゐるんですね」なんて渡したりしながら（笑）、そしたら田辺先生も短歌をなさつてたのかな、詩心のある方でした。

松本 一度、お目にかかつたことがあるんですよ。ずっと何十年も前のことですが。

江口 あ、そなんですか！

松本 たぶん、あの方が田辺先生だらうつて、不勉強でその程度の認識で全く恐縮なんですが。文学学校絡みで、何人かで仲良く一緒にカラオケを歌えるような難波のスナックに行つてゐるんです。そこで田辺先生が淨瑠璃かなにかの謡い、すごくお上手で、その一節を朗々と吟じられたんですよ。それが印象深くつて。だから田辺先生がどういう先生なのかなんのか分からずに席を一緒にしていただいて。

江口　へえ、そんなことがあつたんですか。田辺先生の講座

ではモンテニユの講読から始まつて、シモーヌ・ヴエイユを読んで、アランを読んで。モンテニユは私、若い時は読みませんでしたけど、シモーヌ・ヴエイユやアランはもちろんパスカルも読みましたし、若い頃にちよろちよろと自分が読んだ以上のことを教えていただきました。あの先生はパスカルが基本的なご専門なんですね。私も学生の時はちらつとかじつただけのものを、本格的にやつたのはその二〇〇〇年以降。ですが、先生は二〇〇八年にお亡くなりになるんです。ノエルの私が訳している文を「ぜひ刊行してください」

というお手紙をいただいて、そのままになつて。やっぱりそういうふうに言つてくださる方がいるから、六十年代ではこれをしようという、刊行したいという気持ちがそのときはあつたんです。ところがその後やつぱりそういう方がいらっしゃないと気持ちの立て方がむずかしい。そんなに私がフランス語を仕事で使つてきたというほどの自信もないですから、分からぬこともいっぱいあるんですね。ずるずるといって、肝心の六十年代は、故郷のことも終わつた後、日本詩人クラブのお仕事もあつたりして、ますます気持ちが遠ざかっていくかけたら、今度は日本詩人クラブの元会長である清水茂さんが、――上京するようになつてから「多島海」を差し上げるようになつたんですが、「江口さん、これを本にしなさい」と言つてください。清水さんも三年前にお亡くなりになつたんですけれども、ここまで重なると私も、次はこれを自分の仕事として、最後にこれをしないといけないな、という覚

悟はぼつぼつ頭に固まりかけているところですね。

松本　なるほど、じゃあぜひ、それを実現してください。

（松本が「多島海」の江口さんのマリー・ノエル『内面の手記』の翻訳からランダムに書き留めておいたものを一部掲載する。引用の末尾にある数字は「多島海」の号数である。）

マリー・ノエル『内面の手記』1883-1967より  
沈黙は、すべてを知る。沈黙が、すべてを語る。  
そして昨日悲しみに暮れた魂から、広大な幸福の野が広がる。(1)

\*\*

何も必要としない人は、最も大切なものが抜け落ちている。自足する人間が貧しいのは、自分自身に満足する精神の貧しさだ。人間の価値はすべて、探し求めること、呼びかけること、願い望むことにある。(2)

\*\*

本気で考える人だけが、精神の求めるままに、己の信仰やモラル、また同時代人や同級生、同郷の者、同じ信者の立派な意見はすべて再検討するが、喋つたり本を書いたりする多くの「インテリ」の中に、はたして一度でも、そんな人を見つけることがあるだろうか？／頭が大変い人たちの大多数は、考えることをしない。／考える人とは誰か？……人間に不幸な人だけである。彼は、ほとんどのものを言わない！(3)

\*\*

ああ！魂などなければいいのに。(9)

人間は、「木の実」を食べるまで、善も悪も知らなかつた。

(9) モーセから、肉の恥辱、墮落、穢れは始まつた。モーセから、清め、幕、抑制、偽善は始まつた。

(9) 自分の孤独に溺れることのないように、私をお守りください。

地上の樂園（エデンの園）は森でも、荒地でも、未開の地でもない。庭である。……秩序ある自然。旺盛な生命

力を、一つの「地から」で調和させてある。

(9)

キリスト教徒であることは、利益を捨てた人間として人生に賭けることである。存在の罪、所有の罪

(10)

エデンの園には対立する二本の木がそびえている。「生命の木」と「知恵の木」。

(10)

フランシス・ジャム……この詩人に神の恩寵が降りたのである。広場で騒がしくする代わりに、彼は、見事に

己の孤独の中によどまつた。野の泉はあまく、忘れられないもの。一口飲めば私たちの唇に立ち上つてくる、大地の聖なる新鮮さ、大地の澄んだひたすらな青。

(12)

年老いた私の乳母が死にました、可哀想な人です！でも乳母は、長い間苦しい生活をしていましたから、それが唯一、休息する方法だったのです。私は、たとえ自分がどつぶり詩に浸かっていても、一生世間に苦しめられる貧しい人たちに、けつして嫌悪感を与えてはならないと思つています。

江口 「多島海」にも書きましたけれど、翻訳することはなんとかかんとかできましても、いろんな文化的な脚注をつけないといけないと、いう分が、そこまでいろんな資料にあたれるだけの力があるかな、というものもありますので、ゆつくりと落ち着いて、という感じでありますね。

松本 江口さん、脚注の付け方、うまいですね。さりげなくて、これなんかもそうだけれども、こういう脚注の付け方がなかなかいいなと思つて。

江口 その鳥の文ですね。詩を書いた後に、ほんとに、ちょうど犬の散歩から帰ってきたときですけど、ビニール袋が犬の袋にあつたので、ぱつと手にはめてシロハラをつかみました、あつたかつたからびっくりしましたね。もう詩の中にそれは書けないけれども、現実にあつたことだ、ということを入れたかつたんですね。

松本 鳥の名前もよく知つてらつしやいますよね。江口 それは今の住んでるところに越してからなんです。その前から多少関心はありましたけど。今の家は中古で、神戸の地下鉄ができる直前、地下鉄ができたら山の裏からも新

幹線の駅にまつすぐ行けます、という公報を読んだのです。

故郷帰りの多かつた時なん、それなら新幹線が近いから、と決めました。引っ越しして初めての冬、そこは標高が、駅は三四〇メートルぐらい、そこからまだ坂道を上がったところに家がありますから、もうちょっと高いんだと思うんですけどね。雪が降つて庭が真っ白に積もつた日に、ルリビタキが来たんです。青色の小さな雀ぐらいの鳥です。すごく感激しましてね。それから来る鳥、来る鳥を図鑑と首つ引きで対照して、子供の手が離れたとき二十年ぐらい前からかな、バードウォッチングに行くようになつたんです。でもあの鳥の詩を書くときは、どうしてこんなに——家の前の道路の上に、送電線が七本ぐらい並んでますけれども、この辺りばっかり鳥が落ちて来るんだろうと鳥の渡りについても調べたりして、そういうことなのか、というのが分かりました。

松本 それを読んで、ああそなんだ、鳥は夜に渡るんだ、と。

江口 それから家の近くの、もうちょっと南の方のダム湖なんかにもオシドリが来ますから。ああ、あそこに行く途中だつたのかな。ちょうど我が家があつて、送電線があつて、その南側にダム湖があつて、そこでオシドリのバードウォッチングもしてるんですよ。家の植え込みの中に落ちていたのは、きれいなオスのオシドリでした。

松本 鳥のこともそうだし、犬もそうだし、動物に対して、とにかく江口さんつて優しいんだなあと思つて。

江口 いや、夫がわりとそういう面倒を見るんです、犬とか。

鳥のほうは私ですけど。

松本 そうですね。ご主人のご理解と優しさがあつてのことですね。もつといろいろお聞きしたかつたですが、またの機会に。本日はありがとうございました。

於 大阪文学学校 二〇二三年一月二六日